

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 2 年度実施分）の分析について

（ 共通教育センター ）

「大学での学びの実態」部分 担当 大野裕史

評価する点	<p>1. 入学した時点と比べて、学生自身の能力や知識がどのように変化したかを尋ねた 1 年生では「Q.コンピュータの操作能力」が増えたと回答する者が最も多く、「大きく増えた」または「増えた」と回答した者の割合は 85%を占める。</p> <p>コロナ禍において本学が迅速にオンライン授業に対応できたこと、全学必修である共通教育科目「情報活用」がその下支えになっていることを学生が実感した結果と受け止める。</p> <p>2. 「学生自身が文献や資料を調べる」「授業中に学生同士が議論をする」を経験する 1 年生の割合が多く、その他多くの項目においても国公立大学 G よりも高い値を示している。</p> <p>全学必修である共通教育科目「初年次セミナー」において徹底した「文献調査」「ディスカッション」の重要性を教授している結果と受け止める。</p>
課題と考える点 (3点以上)	<p>1. 授業中、教員の考え方や意見に意義を唱えた 1年6% 上9%</p> <p>2. 学内での学習支援を受けた 1年10% 上18%</p> <p>3. 単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した 1年6% 上22%</p> <p>4. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間 1年生では「全然ない」と回答する者が最も多く（約30%）、 3年生では「1～2時間」と回答する者が最も多かった（25%程度）。</p> <p>5. 読書をする時間 本学の学生のうち、最も多くの者が「全然ない」と回答しており、その割合は1年生で39%、3年生で40%を占めていた。</p> <p>5点取り上げたが、これらから共通している言えることは、本学の学生が「学び」を「受動」と考えている点であり、本学教育における課題であると考えられる。</p>

<p>課題への 具体的な対応案</p>	<p>授業時間外の学習時間については改善が見られる、コンピュータの操作能力が向上したと実感している、「議論をする」を経験する機会も多い。</p> <p>それにも関わらず「自分の興味あることを自ら学びつかみ取ろう」とする意欲に乏しいのは、「学ぶ」動機づけが弱いからではないか？何のために「学ぶ」のか教授する必要があると思われる。そのために、「キャリアアップ」「生涯学習」「一般社会人講師による講演」といった教養科目群の充実が望まれる。</p> <p>また「単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会」については、学生がその機会を知る術そのものが少ないであろうことが推測される。語学教育における LOL や各種講演会を学生にも広く周知するシステムが必要である。また初年次セミナーにおいて「学ぶ動機」について議論する講義回を増やしてもよいのではないか。</p>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>授業時間外の学習時間について 1 年生では改善がみられる。</p> <p>1 年生の最も多くが「6～10 時間」と回答しており、その割合は 29%を占めていた。これは授業において定期的な小テストやレポートを課すことが定着していることに起因すると考えられる。</p> <p>一般的な教養が身についたと感じている学生は 2019 年（53%）までの低下傾向が下げ止まり 2020 年 55%と横ばいになった。しかし他大学と比較して低い傾向のため、教養科目群の一層の充実が望まれる。</p>
<p>コロナウイルス 感染症対応に関 する本学・各部 局の取組との関 連に影響すると 思われる回答と その内容</p>	<p>1 年生および 3 年生の両方において、「C.インターネットを使って授業課題を受けたり提出したりした」と回答する者の割合が非常に多かった。</p> <p>本学では 2020 年度コロナ禍においていち早くオンライン授業に対応し、授業再開することができた。上記の回答結果は、本学の感染症対応を反映するものであると思われる。</p>